

大学に勤務して

第 技術室 吉田 喜美

会社勤めをしていた昭和40年の夏ごろ、大学で技術職員を募集していることを高校の先生の勧めで知り、何をするのか判らないまま機械科主任の先生の面接を受け、10月1日からの勤務が始まりました。当時は、秋休みが始まったばかりで、先生方や学生の姿がなく戸惑ったことを覚えています。また、研究室の先生は、内地留学のため不在で、どうしていいか判らずたちまち体調を壊しました。会社からは、「給料を上げてやるから、戻って来い」と言って来るので、高校の先生に相談したところ、「3～4年は我慢しろ」の一言で長い大学勤務が始まったわけです。他の研究室の先生から「何が出来るのだ？」と聞かれ、会社で経験してきた「アーク溶接なら出来ます」と答え、何人かの先生の実験装置を溶接で製作して来ました。

そのうちに、研究室の先生が内地留学から帰って来られ、実験装置の製作、実験、測定、データの整理などを始めましたが、何もかも初めてのことで、すぐに3～4年は経ってしまいました。

粘性流れの実験では、実験条件を色々変えて測定、データの整理を行い、今になっては「誤差が多すぎる」と言われますが、手と目を使つての計測を繰り返し、理論の一本の線に繋がったことで、喜んだりしていた頃が懐かしく思われます。現在の研究室の教授は、コンピューターを使って一気に多量の計測、データ整理までをやっています。手と目での計測を懐かしがっているのは昔人間と思われても仕方ないです。

物体周りの流れを見る可視化実験では、得意のアーク溶接で特大の水槽を作り、幾つかの研究実験をしましたが、壁近傍に置かれた円柱周りの流れについて、可視化をやってみたかったのですが出来なかったのは心残りです。

その後、最初の教授が定年で退職され、次の教授の実験、装置作り等をやりましたが、実験のやり方やものの考え方の違いで衝突があり、退職されるまで苦勞をしました。人間関係がうまく行かないと、仕事のほうも進まないものです。

僅かな期間でしたが、会社勤めを経験しました。会社では、社長、部長・・・などの命令系統がはっきりしていて、ある程度の「出来ない」などは許されますが、「いや」ならば会社を辞めるか転勤などさせられました。もちろん仕事は、会社の利益に結びつくものでなければならず、単なる興味だけではさせてもらえませんでした。

大学技術部も、新年度から新しい組織がスタートします。大学と名のつく会社の中に“技術部”と呼ばれる部署がはっきりとして、今まで体験してこなかった命令系統が出来て、興味のないことは「出来ない」、「いやだ」は徐々に許されなくなると思います。技術部全員の協力で、立派な“技術部”に育ててください。

長い間、御世話になり有り難うございました。